Q.こんな俺でも世界は救えますか？

山田ヘイタロウ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

河川敷で目を覚ました小鳥遊響。彼には記憶があるが、他の人間の記憶と食い違いがある。異種族の存在を彼は知らない。

そんな彼が自分の生きていた世界とは全く違う世界で、戦いに身を投じる。

久しぶりに設定を少し真面目に考えました。だからと言って、キャラをうまく動かせるかという話ですが。

プロットも特にないです。後々で考えるつもりです。

行き当たりばったりで、適当にやってます。更新できなくなったら、その時点での終わり方を書いて完結にします。

＊カクヨムにて連載しております。こちらで続くかはわかりません。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 6
第3話 …… 12
第4話 …… 16
第5話 …… 22
第6話 …… 28
第7話 …… 32
第8話 …… 40
第9話 …… 45
第10話 …… 51

第1話

『ーー悪いな』

世界が重なって黒く変わる。

顔もしれない男がいた。

この瞬間に小鳥遊《たかなし》響(ひびき)の世界は変わってしまった。

「んあ、寝ちまってたのか……」

小鳥遊は目を覚ました。

心地よい風がふく河川敷。そこに彼は寝転がっていた。どうしてかなんて覚えてはいないが、きっと寝心地が良かったからだろう。辺りは赤くなり始めている。

寝そべっていると頭上に白が見えた。それは女性ものの下着である。

脳の理解が追いつかない。

「響。危ないわよ、こんなところで寝てたら」

その声を聞いて、小鳥遊は少しだけ取り乱しそうになっていた心を落ち着けた。

空色の髪をセミショートの長さに伸ばした少女。服装は黒いセーラー服と短めのスカート。

その姿には見覚えがある。

「小夜《さよ》姉……」

「オークとかエルフに襲われても知らないわよ?」

「オーク?エルフ?」

突然のファンタジーに小鳥遊は理解が追いつかない。

「何、ボケてるの?ほら、あそこに見えるでしょ、空島」

そう言って彼女は指を指して小鳥遊に教える。小鳥遊の目には確かに空に浮かぶ巨大な島が見える。

「響も戦士《ウォーリア》じゃないでしょ?」

小鳥遊には何も理解できない。いつも頼りになる小夜が突然、頭が

おかしくなったとしか思えないのだ。
「ほら、帰ろ」
　そう言われて、座ったままの小鳥遊の脇に腕を突っ込んで無理やり立たせる。
「あのさ、小夜姉」
　河川敷近くの堤防を歩きながら、小鳥遊は尋ねる。
「どうしたの？」
「エルフとかオークって何のこと？」
「……覚えてないの？」
「いや、全く何のことか分からなくてさ」
「あの空島が出てきてから、オークとかコボルトとか出て来る様になったことも覚えてない？」
　そんな事を言われても全く分からない。そんな話に現実味だなんて湧かない。小夜の言葉を信じたくとも、信じられないのだ。
「何それ、何のゲーム？」
「本当にわからないの？」
　その言葉に頷いた。
　どうやら、小鳥遊と小夜の間では記憶に食い違いがあるようだ。
「戦士のことも？」
「戦士？」
「異種族と戦う人たちの事」
　何のことかさっぱり。聞けば聞くほどその話はどこか作り物のように思えてならない。
「はあ、どうしたのよ。頭でも打った？」
「そんな覚えはないけどさ」
　そんな事をする時間なんてなかったはずだ。思い返してみてもやはり、あり得ない。
「それより、早く帰ろう。シェルターに帰らなきゃ、死んじゃうわよ」
「家じゃなくて？」
　何故シェルターで有る必要があるのか。それはどことなく予想がついていた。それでも尋ねずにはいられなかった。

「私たちの家はもう無いでしょ。それまで忘れちゃったの？」
家がもう無いなんて、それは流石に信じられない。
「ーーちょっと見てくる」
だから、小鳥遊はその目で見て、初めてその情報を信じたいと思うのだ。
「ダメよ、危ない」
小夜はそう言って、小鳥遊の服の袖を引く。
「子供扱いしないでくれ、小夜姉」
そう言って掴む腕を振り解き、小鳥遊は自分の家に向かおうとする。
「……響まで死なないでよ」
その言葉に小鳥遊は家に向かおうとしていた足を止めて、小夜の方へと振り返った。
「俺までってどういーー」
その言葉は最後まで呟くことができなかった。
突然に突き飛ばされて、小鳥遊はその一部始終を目の前で見ていた。
目の前で小夜が血を吹き出しながら、二つに分かれてしまった。突然、突き飛ばされたこと。目の前で人が血だらけになっていくこと。その二つが要因で、小鳥遊の声は尻すぼみになっていき、そして掻き消える。
「脆いナ、人間ハ」
「……何だよ、それ」
小夜を切り裂いた正体を見た瞬間に、全てが真実であると理解した。何もかもが繋がった。確かに小夜は嘘をついていなかった。
小鳥遊の目の前には豚鼻の桃色の巨人が立っていたのだから。
「アア、しまっタ。殺シてしまっタ」
その手に握る、小鳥遊以上の大きさのある斧を振るい、付着した血を払う。
「女は生け捕リダって言われテタのニ」
「なあ、何だよそれ……」

信じられない。信じたく無い。あのままであれば小夜は死ななくとも良かった。彼女が死ぬ必要なんてなかった。
「小夜姉！」
「ーーごめんね……、響。一人にしちゃうなんて、私最低だ……」
違う。
そんなわけがない。
いつだって頼りになるのが小夜だ。そう言いたかった。それでも喉の奥が張り付いたかのように苦しそうな息が漏れるだけだ。
「響はちゃんと生きて、ね……」
血だらけの手で小鳥遊の頬を撫でる。斜めに切られた体は内臓ごとすりつぶされたかのように断面はぐちゃぐちゃで、それは見ていて気分が良いものではない。
これでは生きていられない。どれだけの医療技術があったとしても、直すことなんてできるわけがない。
「あ、ああ……」
こみ上げてくる吐き気と嗅覚を蹂躙する鉄の匂い、視界は赤一色に染まる。
小鳥遊はその場で嘔吐した。耐え切れなかった。気持ちが悪かった。
そして、それは思わぬ結果を引き起こす。
「臭イ、臭イゾ！」
吐瀉物の匂いと血の匂いが混じり合ってそれは、さぞ最悪な匂いだったはずだ。オークの鼻は人間以上に効き、その臭いに鼻をつまむ。
「あああああああ!!」
叫んで逃げる。
逃げながらに叫ぶ。ダメだ、嫌だ、怖い。そんな感情に支配されている。
「小夜姉っ、小夜姉っ！」
叫んで、その存在を思い返してもどうにもならない。失った者、モノ、物。その全てが取り返せないのだと理解する。

「待て、小僧！」
オークが黒髪の少年を追いかける。
「っ！」
オークはその巨体に似合わず凄まじい速度で小鳥遊に迫る。その大きな腕が小鳥遊の背中に届く。そう思った瞬間にゴトリと鮮血を撒き散らしながら、オークの伸ばした左腕が落ちた。
「ちっ、オークかよ。つまんねぇ。しかも弱えやつかよ。経験値少なっ。レベル上がんねぇしよ……。ついてねーな」
柄が悪い、男だ。ワイシャツを着崩した赤髪の男。年齢は小鳥遊より少し年上くらいだ。
「ははっ、オークに追いかけられて泣いてんのかよ、ダッセー」
馬鹿にしたような態度で彼はハルバードを振るって血を払いながら来た道を戻っていく。
「ーーいって……」
その途中で小夜の死体に躓く。
男が下を見て、それを確認すると小夜の体を蹴り飛ばした。
「こんなところで死んでんじゃねぇよ、邪魔くせえ」
それが許せなかった小鳥遊は男の背中を追いかけてその肩を掴んだ。
その瞬間に地面に叩きつけられた。
「触んじゃねぇよ、雑魚が」
そうして男は去り際に唾を吐きかける。
「うぐっ、あぁあ……」
あまりの悔しさと、不甲斐なさに自らの目を隠すように両手を押し当てる。その下には涙が浮かんでいたのだろう。

第2話

「死亡者の身元が分かりました。彼の証言と一致します」
「……」
小鳥遊は戦士達に保護された。
経緯はどうであれ、これで彼自体の安全は確保されたのだ。
「……お前が襲われたときに、ここにいた戦士は誰だ？」
「分かりません……」
小鳥遊にはその男が誰なのかはわからなかった。
「特徴は？」
「赤い髪……。百八十はあるんじゃないですか……。柄の悪いやつです」
虚とした目をしている。
それに対して戦士は何も言わない。興味もないのだろう。
「アイツか……。まあ、君も助かって良かったな」
それだけで話は終わって、スーツを着た表情の薄い男は背中を向けた。
良くなどない。助かってなんかいない。
「本当にどうにもならないんですか……？小夜姉は、彼女は助からないんですか……？」
この世界にゴブリンがオークがエルフが、吸血鬼が、異種族がいるなら蘇生魔法が存在するかもしれない。
「蘇生はーー！」
「君は現実が見えていないのか？」
スーツを着た男は現実を突きつけるような厳しい口ぶりで告げた。
「死んだ人間が生き返る？ゲームだとかアニメだとかに感化されすぎだ」
「なら、何でこの世界に異種族がいるんだよ……」
「さてな。俺もレベル上げが必要なんだ。今はまだ五十六レベ。今回は神谷《かみや》に取られたがな」
「何だよ、レベルって……」

「詳しいことはそいつに聞け。こう見えても忙しいんだ」
そう言ってその男はその場から居なくなってしまう。
「小鳥遊くん」
声をかけてきたのは痩せ身の男だ。茶髪を掻き上げたような髪型をしている。その姿は先ほどの男と同じ黒いスーツを身に纏っている。
「車に乗ってください」
「ーー待てよ！教えろよ！」
興味も失せたようにその言葉に男は振り向きもしない。
小鳥遊の体を車に案内した男が止める。
「小鳥遊くん。説明しますから！車に乗ってください！」
「何だよ、戦士って！お前らは何で戦ってんだよ！」
その言葉に男はピクリと反応して、足を止めた。ゆっくりと顔だけを向けて、答える。
「ーー戦う理由なんて、俺たちが戦えるから戦ってる、それだけのもんだ」
彼らに何かを守る義務はない。戦士であるから、人を守る義務が存在するなどと間違っても考えてはならない。
「人を守ろうとは思わないのかよ……！」
「何で守る必要がある」
それが致命的なまでに噛み合わない。
「俺が人を守って得があるのか？経験値もレベルも稼げない」
「ふざけんな……」
「ーー今回死ぬのが自分じゃなくて良かった。それで生きてる奴らは幸せだ。お前もそう思っとけ」
「何で力があるのに助けられた命をーー」
「……オークには何の旨味もない。そいつらが俺たちに与える恩恵なんてレベル十前後までを安全に上げるくらいだ」
全てが違う。
価値観が、命の天秤が、尽くズレている。
「お前には力がなかった。残念だったな」

守る力を持っていない。
だから、死なせてしまった。全ては小鳥遊の選択ミスだ。あんなことをしなければ良かった。
この男には勝つことなんてできない。
「くそが……」
悠々と去っていくその背中を睨みつけることしかできない。
「行きますよ」
痩せ身の男のその言葉に仕方なく従うことにした。
「小鳥遊くん」
「何ですか」
痩せ身の男が話しかけてきた。それを無視するのも躊躇われ、尋ね返した。
「戦士は嫌いですか？」
「大っ嫌いです……」
それは赤髪の男と、先ほどの男を見ての感想だった。
「そうですか。しかし、戦士がこの世界を結果的に守っているのも事実」
「……」
「イギリスの経済学者のアダム・スミスは言いました。それが利己的であっても結果的に世のためになる事がある。それが彼らです」
「だから、何だって言うんですか」
「気に食わなくても構いません。彼らも一応は役に立っています。ただ、君は戦士の中の一部しか見ていない。それで判断しようとしては、早すぎませんか？」
運転席に座った彼はエンジンをかけて、ドライブにシフトレバーを入れた。
「シェルターには君が知らない戦士がいます。優しいものも、屑なものも。信じたいならその個人を見て、知ってください」
アクセルをゆっくりと踏んで、車を走らせる。
この車は異種族の攻撃から車体を守るために少しばかりの装甲が付いているが、至ってシャープな車体である。

「一概に悪であると決め付けるものじゃありません」
「……」
「ーーまあ、それを決めるのは君ですが」
この男は少しだけ信じてもいいかもしれない。そんな事を小鳥遊は思った。
「因みにですが」
彼はそう前置きをしてから、続きを話す。
「私の名前は加藤《かとう》泰治(やすはる)です。小鳥遊響くん」
「……よろしくお願い、します」
「ええ」
車は走り続ける。
ハンドルを握る加藤と、助手席に座る小鳥遊。信号が赤となり、車が止まったところで小鳥遊は思い出したかのように話し始めた。
「加藤さん」
「はい?」
「戦士って何ですか?」
小鳥遊は窓の外を見ればそこは見たことのある風景だった。違いといえば、人がいない事くらいだ。
「ーー戦士はレベルシステムと経験値システムを持つ、強化人間の事です」
「何ですか、それ」
「直人さんも言っていたでしょう」
直人というのは先ほどの黒スーツの男の名前である。レベル五十六の中堅戦士。
「……まず、この世界には空島と共に『幻想合金《ファンタジックアロイ》』と呼ばれる特殊合金が生まれました」
信号が青に変わり、再びアクセルを踏んで車を発進させる。風景は変わっていく。
「その合金の利用方法を伝えたものがいます。彼は賢者と名乗りました。……しかし、自分の名前は名乗りませんでした」
「わからないんですか?顔も?」

「終始、フードと仮面で顔を隠していましたからね」
顔を見せることがなかったということは、よっぽどシャイだったのだろう。
再び窓の外に意識を向ければ正面からゴブリンが迫る。それも三匹。
「ーーこれ、大丈夫何ですか!?」
不安に駆られ小鳥遊は加藤に大声で尋ねた。
「これでも装甲が付いてますからね。このまま突っ切れます」
そう言ってアクセルをより強く踏み込んだ。車は急加速し、重力が身体を襲う。窓の向こうには、車体に撥ねられ吹き飛んでいくゴブリンの姿が見える。
「どうですか、車もなかなかやるでしょ?」
「はぁ〜っ」
小鳥遊はそれに安心したのか大きめな息を吐いた。
「ーーさて、他に気になることはありますか?」
「レベルの限界は」
「九十九です」
「……百じゃなくてですか?」
「……ええ」
九十九止まりのゲームがあることも理解はしている。だから、これといって疑問もない。
「……ええと、戦士が使用している武器は?」
「基本は鉄とか金属です。時折、オリハルコンを使った武器もありますが」
「オリハルコン?」
伝説上の鉱石のはずではないか。本当にそんなものがあるのか。
そんな疑問から思わず口を突いて出た。
「ええ、世界最硬の鉱石です。これは幻想合金の発見からしばらくしてから発見されました」
見ないことには信じられない。
とは思ったが、オークやゴブリンがいる以上、ないとも言い切れな

い。
疑うことは大事だが、それでは間に合わないこともある。
「あの、賢者は戦士なんですか？」
「分かりません」
「は？」
「彼は私たちに技術を伝えただけです。戦士であるかなんて分かりません」
戦士とは戦う者たちを示す名であるのだから、賢者と呼ばれた男が戦っていたのかなど分かるわけがない。
「それに、彼は人類に技術を与えると姿を晦ましてしまいましたから」
確かにいたのだろうが、見つけることができなかった。それが正しい。
法定速度でしばらく走っていると、目的のシェルター近くにまでたどり着いた。
巨大なシェルターだ。
警備態勢も万全なようで、安心して居られる場所なのだろう。
「それでは私はこれで」
そう言って加藤が行こうとする。ただ、このままでは部屋が分からない。声をかけようとして、やめた。
何故かどの建物の何階、何号室かもわかる。自分が今どこで生活しているのかも。
完全にこの場所だけは異種族の恐怖から断絶されていることも理解できた。
「と、その前に……」
この場を去ろうとしていた加藤が車を端に停めて、降りてくる。
「小鳥遊くん。君は戦士に興味ありませんか？」

第3話

「戦士に？」
　尋ね返せば、加藤は笑う。
「君が今日であった彼らが嫌いなら、それを反面教師にして君の求める戦士になればいい」
「それは……」
「幻想合金があれば君は戦える」
　加藤の言葉に思うような答えが出せない。求める正解がわからない。
　それは小鳥遊にとって何が最良であるか、考えてもわからないから。
「……」
「君は、また目の前で人が死ぬのを黙ってみていたいのですか？誰かの助けを、願っているだけですか？」
「そんなわけ……ない」
　ギリギリと歯を噛み合わせ、右腕には力が入る。死んでしまった小夜の姿を思い浮かべて、自分の非力を痛感する。
　あの時、自分が戦えたら。
「力があれば高月《たかつき》小夜の悲劇を繰り返す必要はありません」
　あのような悲劇は二度とあってはならない。誰かが自分を守って死ぬ。そんなのは耐えられない。
「俺はーー」
　この答えが正しいかどうかなんてわからず、ただ加藤の言葉に上手く乗せられただけかもしれない。
　それでも、この決断を下したのは他でもない小鳥遊自身なのだ。
「ーー戦うよ」
　その言葉には迷いなどない。
　守られるのではない。自分が誰かを守るのだと。救うのだと。その思いが、戦うという答えを導き出した。

その答えに、加藤はにっこりと笑った。
「そうですか。では、そうですね、今日は休みましょう。明日の午前十時にまたここに来てください」
そう言って車の方へと彼は戻って行った。
自分の常識が当てはまらない世界で、突然に彼は選択を迫られ、そして、戦う事を選んだ。
望まれていた英雄のように。

「幻想合金か……」
確かにインターネット上には幻想合金について記載されているものがあった。
その全てが加藤の話した通りに、空島の出現と共に現れ、賢者を名乗る男がその使い方を伝授した。
それにより生み出された二つのシステム。何のためにこのようなシステムが必要になったのか。
異種族と戦うために必要だったのだろう。では、どうしてこのシステムを賢者は作り上げたのか。そんなものは情報として載っているわけがない。
「これのおかげで人類は異種族と戦えている、らしいな。じゃあ、レベルアップの原理ってのは何なんだ？」
経験値システムの作動要素。それもまた幻想合金の項目に記されていた。
『幻想合金は人の体に埋め込まれ、心臓と癒着し、その体を強化する。異種族の体に流れる青血《ディープ》を浴びる事で経験値システムとレベルアップシステムが機能する』
乗っているのはこの程度。異種族を倒す事でレベルが上がる原理は理解したが、その経験値には差があるはずだ。
しかし、青血について調べるのも面倒だと思ってか、小鳥遊はスマートフォンをベッドの上に投げ捨てた。
そして、彼も背中からベッドに倒れ込む。

「……」
目を閉じれば、思い出すのは、目の前で悲惨に死んでいった小夜の姿。
現実とは思えない光景。
そんな光景が浮かんで、目を開いた。
これが今となってはオークもゴブリンもいる現実にいるのだ。
そうして、小夜の死を思い出して彼は涙を流す。
動くことも億劫で今日はもうこのまま眠りについてしまおうと目を閉じようとした時、扉が叩かれた。
「……」
誰が訪ねてきたのか、それは気になったが動く気力もなくそのまま眠りに着こうとした。
「ーーあー、響」
しかし、扉の向こうから聞こえてきた、その声に小鳥遊は閉じかけの目を開き、ベッドから起き上がった。
その声には聞き覚えがあったのだ。
当たり前だ。
その声の主はーー、
「……大丈夫か？」
小鳥遊の友人の声だったのだから。
扉を開ければ、月のような薄い黄色の髪を首の辺りまで伸ばした少年がいた。白いぶかぶかのパーカーを着ていて、小柄。
それでも年齢は小鳥遊と同じ。
「大丈夫、じゃないよな……」
「光樹《みつき》……」
とりあえず、小鳥遊は彼を自分の部屋の中に入れた。
「悪い、迷惑だった？」
「そんなことない」
寧ろ安心感を覚えた。目の前で自分の知っている人間が死んでいって、この世界の事を少しでも知って、それで友達が生きているかなんてわからなかったから。

「あのさ、こんな事お前に言うのもおかしいと思うけど、さ……」
どこか言葉に迷っているような、申し訳ないような顔をして、彼は続きを吐いた。
「俺、戦士になるよ」
「そっか」
「もう、誰も頼れなくてさ……。働かなきゃ食ってけないから。……響もどうだ？」
「俺も？」
「こんな事言うのも悪いけど。お前も家族居ないだろ……」
この瞬間に自分の家族が全員、既にこの世にいない事を理解してしまった。
「そう、だな」
そんな小さな呟きを漏らす。
この世界では、もう誰もいない。家族がいない。その喪失に胸にぽっかりと穴が空いたような空虚を感じる。
唯一、目の前に残った光樹を失うわけにはいかない。
「俺も戦うよ」
それは決まっていた答え。
だとしても、覚悟は固まった。
「……ありがとな」
その礼は筋違い。
これは光樹のためなんかではない。小鳥遊が死なせたくないと願っただけ。
「なあ、光樹。お前は死ぬなよ」
それは願い。
もう誰も失いたくない。必ず守ると。彼は、そう誓う。

第４話

「では、行きましょうか」
小鳥遊は昨日の場所に来ていた。シェルターがよく見える場所。
加藤は小鳥遊がいる事を確認してから、歩き始めた。
「これはどこに向かっているんですか？」
人が住む区画から外れて、加藤の先導について歩いていく。
「戦士達の拠点ですよ」
「拠点ってことは……」
ギルド。
名前は確かそうだったはずだ。聞き馴染みのない言葉ではあるが、何故か小鳥遊の頭に思い浮かんだ。
「ええ、ギルドで君に幻想合金を植え付けます」
「気になってたんですが……」
「はい？」
「幻想合金は心臓と癒着するんですよね？」
「ええ」
「身体に害はないんですか？」
その質問に加藤は少しだけ考えるような間を置いてから答える。
「ありませんよ」
その答えに安心を覚えることができない。加藤が即答しなかったから。
「ただ、それは私が知る限りという意味です。だから、君が確かめるんです」
「俺が、ですか？」
「とは言え、今のところ危険なんて見つかっていないそうですが」
「……そうですか」
本当にその通りなのか。
疑わなければ生きていけないだろうが、疑ってばかりでは判断が間に合わない。
くるりと加藤は一度立ち止まって、小鳥遊に振り向いた。

「足下気をつけてくださいね」
　小鳥遊はそう言われて足下に目を向けると、少しの段差があることに気がついた。
「はい」
　そう返事をすると、それを聞いていたのか聞いていないのかわからないが加藤はまた正面を向いて歩き出す。
「ギルドの中には様々な施設があります。訓練場であったり、待合であったり。一般開放されているエリアもありますよ。ご存知でしたか？」
「あ、はい」
　そう言ってついて行くと、下に向かうエスカレーターがある。加藤がエスカレーターに乗ったため、小鳥遊も自然とエスカレーターに足を乗せた。
「ーーそして、今向かっているのが開発施設。毎日行われているわけではありませんが、日々、戦士は増えて減ってを繰り返しています」
「何故、俺を案内してくれてるんですか？」
「何となくです。まあ、常務内容としては違いますが。問題がありましたか？」
「いえ、助かっているんです」
　こんな事をする必要などあるはずも無いのに。態々、忙しいであろう彼が案内をしてくれている。それが結果的に記憶が噛み合わない小鳥遊にとっては助けとなっていた。
　それでも所々は覚えている。
「本来なら、私ではなくこの施設にいる別の者が案内しますが、私が声を掛けたのですから」
　エスカレーターは下へと動いていき、ようやく地下へと着いた。
「では、私はこれで失礼します」
「え、加藤さん？」
「大丈夫です。後は彼女がやってくれます」
　その言葉を聞いた瞬間に後ろに気配を感じた。
「ほうほう、君がヤッスーが連れてきた……、ええと」

「小鳥遊響です」
　ブカブカの白衣を着た身長の小さな少女がそこには立っていた。ボサボサの長いアッシュグレーの髪。眼鏡をかけた少女は、小鳥遊の少し年下に見える。
「そう、響くんね」
「はい、よろしくお願いします？」
「敬語は要らないよ。データ見た感じ君の方が年上みたいだし」
　それだけ言って、少女は小鳥遊の背後に回って背中を押す。
「ほらほら、早速行こうよ」
「あの、行くって？」
「もちろん開発室にだよ。君には戦士になるために幻想合金を埋め込まなくちゃならないんだ」
「あの、名前を……」
「私は天才、天星《あまほし》きららちゃんだ」
「えと、天星さん」
「ん？」
「大丈夫なんですか？」
　少しの不安を感じてそう尋ねれば、天星は年相応の少女らしくニンマリと笑った。
「任せたまえ。安全じゃなければ開発室にいるわけがないだろ？」
　そう言って彼女は小鳥遊のことを開発室に押し込んだ。
「さて、一先ずは君に幻想合金を埋め込むとこからだ。それが終わったら、他にも説明しなきゃならないことがあってね」

「どうだい、幻想合金は」
　パチリと目を開くと眼鏡をかけた少女の顔が小鳥遊の瞳に映る。
「どうって言われても」
「まあ、胸を切って開いたんだけどいつ見ても不思議だね」
　そう言って天星は笑う。
「ひっ!?」

小鳥遊の今の格好は上半身裸に下はパンツ一枚。
手術が終わった彼は首を曲げて、自分の胸を見る。
「あはは、そこまで驚くかい？まあ、幻想合金ってのは不思議なもんでさ再生機能も上げてくれるみたいなんだ」
「ーーそれは死人も生き返るんですか？」
一縷の希望を抱く。
そんなものはあり得ないと理解していても、追い求めてしまう。
「生き返らないよ……。それが適応されるのは生きてる人間だけ。死んでしまったら細胞の働きは無くなって再生機能もないからね」
人が完全に死んでしまっては人は生き返ることはできない。それはどんな世界でも変えようのない真実だったのだろう。
「まあ、何はともあれこれで君もレベルアップシステムと経験値システムを手に入れたわけだ」
「あんまり実感ないな」
「まあ、そんなもんだよ。それに三日は安静にするように」
「何でですか？」
「幻想合金が心臓に癒着し、身体に馴染むまでは結構掛かるからね」
「そうなんですか？」
「私の言葉を信じなさい！」
そう言って彼女は眼鏡をカッコつけて持ち上げる。この世界のことについてあまり知らない小鳥遊が自分勝手に動いても良いことはないだろう。
「ああ、それと戦うんだったら、異種族の情報は本を購入したほうがいい」
「インターネットじゃダメなんですか？」
「分からないかな？インターネットの無料サイトの情報も本の情報もそのまま鵜呑みにしてはいけないけど、それでも金を取ってる本の方がまだ信用できる。言うだろ？ただより怖いものはないって」
それもそうだ。
命がかかっている以上、金をかけて安全を最大限保証できた方がいい。

「分かりました……」
「まあ、嵩張るって言うなら、電子書籍をスマホにでもダウンロードするか、すぐに開ける何かに纏めておくか。それくらいの事はした方がいいよ」
その提案は嬉しいものだ。
少しばかり胡散臭そうな見た目にも映るが、内面は優しい少女のようだ。
それと。
そう言って、彼女は言葉を続けた。
「言っておくがレベルは自己申告制だ。くれぐれも見栄を張って高いレベルで報告しないように」
「えと、そのレベルというのはどうやって確認できるんですか？」
ステータスオープンと言えば開けるわけでもないだろう。そんなのはもはや現実ではなくゲームだ。
「君がレベルを知りたいと強く念じれば、数字が浮かぶはずだ」
その通りに小鳥遊はレベルを知りたいと念じてみる。そうすると脳内に浮かんだのはたった一つの言葉。
ーーＥｒｒｏｒ．
「さて、君は今レベル一だと思う。合ってるかい？」
その言葉に小鳥遊は何と答えればいいのか、分からない。ゴクリと喉の奥で音が鳴った。唾を飲む音。それがやけにでかく心音が煩い。手術をしたと聞いたせいで、痛みもいつも以上に感じる。
それでも、落ち着いて答えるべきだ。悟られてはならない。これを出して何が起きるか。いや、もしかしたらこれは一時的なものかもしれない。
そう思う事で彼を混乱に落とし込んだＥｒｒｏｒの文字は大した問題でもないように思える。
「は、はい。レベル一です」
どうせ、すぐにレベルが判明する。だから、気にする必要はない。後で確かめればいい。
「よし。帰っても良いよ。レベルの申告はギルド受付近くに紙がある

からそれでお願いね。一先ずはこっちでレベル一は報告するけど、一ヶ月に四回は申告の義務があるから忘れないようにね」
「はい」
どうせこれだけ頭を悩ませたって一日でこの問題は自然解決する。
『レベル　Ｅｒｒｏｒ』
検索。
それで、それらしい情報など一つも得られない。
小鳥遊響の存在は、この世界では特異的なものであった。

第5話

小鳥遊が開発室を出ると、天星も外まで付いてきた。
「帰り方は分かるかな？」
「エスカレーターですよね？」
「まあ、来た道を戻ればいいだけだからね」
じゃあ、気をつけてー。
そう言って少女は開発室に戻って行き、扉を閉めた。
「ーー小鳥遊くん」
若干暗い地下、小鳥遊が扉の前に突っ立っていると、名前を呼びかけながら近づいてくる一つの影があった。
痩せ身の男、加藤である。
その手には紙パックのジュースが握られている。
「あ、加藤さん」
「お疲れ様でした」
「あ、ども」
「三日は安静と聞きましたね？」
「はい」
「気を付けてくださいね」
「はあ」
そう言って彼は持っていた紙パックを潰して挿していたストローを奥の方へと入るように突っ込んだ。
「上まで案内します」
「ありがとうございます」
小鳥遊は時折、胸を撫でながらその背中を追いかけて上りのエスカレーターに足を乗せた。
「気になりますよね。分かります。私も貧血検査で針を打たれた場所は気になりますから」
「それは分かりませんけど」
「あ、そうですか。ベタベタ触りすぎると血が出ますよ」
「え！」

ピタリと小鳥遊は動きを止めて、腕を太腿の横につけた。それを見て加藤はクスクスと笑う。
「冗談ですよ」
そうして、エスカレーターは上昇していき、地上階に着く。
「そうだ、小鳥遊くん。野菜ジュースとパンは要りますか？」
まるで献血が終わったかのような感覚に思えるが、それ以上の事があったはずだ。
「貰っておきます……」
金が財布にある以上にあるのか、それがよく分からない現状、貰えるものは貰っておくべきだろう。
「ではこちらを……」
そう言って彼は黒のビジネスバッグからスッと二百ミリリットルの紙パック野菜ジュースと、あんぱんを差し出してきた。
「いつも持ってるんですか？」
「はい。野菜は健康のために必要ですから」
それだけ告げて加藤は回れ右をして去っていった。
ギルドの地上階はそれなりに騒がしく、人も意外なほどいる。
「ーーあ、響！」
小鳥遊は自らを呼ぶ声に振り返った。走り寄ってくるのは月のような髪の、黒いジャージを着た少年だ。
「光樹……」
小鳥遊はその名前を呟く。
「もう、手術は受けた？」
「ああ」
「そっか、なら丁度いいや。武器買わない？」
「武器？」
「何だよ、まさか響は武器なしで異種族と戦うつもりなの？」
そんなわけはない。けれど、小鳥遊にはどこで装備を整えるべきなのか分からない。
「もしかして武器屋のこと知らないのか？」
「何だよ、武器屋って……」

加藤からも天星からも説明は受けていない。加藤はそれも含めて天星が説明するのではないかと思っていたし、天星は天星で説明しなくとも分かるだろうと思っていたのだ。
これは天星の怠慢であった。
だが、その常識が響には存在しない。
「二階に武器屋があるんだよ。一般開放されてないから、噂程度だったから、無理もないかな」
そうだったのか。ただ一つ不安な点があった。
それは金が足りるとは思えないということだ。
「大丈夫なのか、金とか……」
「俺たちはレベル一、手術受けたばっかの初回利用ってことで大幅に値引きがされるんだってさ」
「なるほどな……」
一先ずはどれほど値引きされるかはわからないが。
「オリハルコンの武器もあるのか？」
「オリハルコン？」
オリハルコンという言葉を繰り返して、直ぐに首を振った。
「いやいや、無理だよ。オリハルコンは高すぎるから。値引きもされないし、まず手が出ないと思うよ」
「そうなのか？」
「と言っても、どれくらい高いかは分かんないけどさ」
一先ずは話もこれで終わり。
光樹が歩き始める。道がわからない為、光樹の後ろを付いて歩く。
光樹は上りのエスカレーターに乗る。小鳥遊もそれに続く。
「武器は何がいいと思う？」
「弓とか銃は？」
突然の質問に、小鳥遊は安全と思える物を提案してみるが光樹は難しげな顔を見せた。
「弓はレベルシステムで引き上げられた力を生かせるけど、銃はなぁ。それに弓だって近付かれたらお終いだし……」
様々な要因もあってか、遠距離武器の強みは大してないようだ。

「ここは無難に剣か槍かな……」
エスカレーターが上り二階に着くまでの間、どの武器が良いかと二人は話し合う。
「おお……」
小鳥遊の隣から感嘆の声が聞こえた。それは初めて来る武器屋という場所に感動を覚えたためだろうか。
武器屋には剣や槍が並べられている。どうにも弓は人気がないのか売れ残っているようだ。
それも、矢を購入しなければならないというマイナスがあるからだろう。
「君たち、見ない顔だね」
黒いセーターを着た髪も目も黒の、夜のような少女が二人に声をかけた。
「今日、戦士になったばかりで……」
光樹が受け答えする。
「そっか。気をつけてね」
「心配していただきありがとうございます」
「同じ戦士だし。人に死んで欲しくないのは当然だよ」
少女はそう言って笑う。
成る程、加藤の言った通りだ。必ずしも戦士が屑であるという訳ではない。
「武器は命を預けるものだから慎重に選んだ方がいいよ」
命を預けるものに金をかける事は悪いことではない。タダの命綱と、金のかかった命綱、どちらが安心できるかは決まりきっている。
「時々、武器としては最悪な粗悪品もあるんだよ」
「見分け方とかは？」
小鳥遊はそんな粗悪品をつかまされたくはないために、彼女に尋ねると、
「まあ、初心者じゃわからないよね。かく言う私も感覚で選んじゃってるけどね」
たははと、小さく笑う。

「それにオリハルコンを使うようになってからは、あまり武器も買い足さなくなったし。でも初心者よりは見る目あると思うよ？」
「い、オリハルコン!?」
彼女の言葉に光樹はオーバーにも思えるような驚き方をした。
「どこからそんなお金が？」
オリハルコン製の武器というのは高級でなかなか手が出さないものだと聞いたが。
「あはは、こう見えてアタシ、ベテランなんだよ」
どこか自慢げにも聞こえるが、嫌味を感じさせない。彼女の人柄の良さが滲み出ているからだ。
「そういえば自己紹介してなかったね。黒羽《くろばね》ユカリだよ、宜しくね」
ニコッ。
そんな擬音が聞こえてきそうなほどの完璧な、アイドルのような微笑みを彼女は浮かべる。
「小鳥遊響です」
「あ、斎藤《さいとう》光樹です」
黒羽ユカリ。
そのような名前には小鳥遊には聞き覚えというものがないが、どうやら光樹には聞き覚えがあるようだった。
「えええ！黒羽ユカリ!?」
そう言って光樹は黒羽の姿を凝視する。すると黒羽は若干恥ずかしげに視線を逸らす。
「有名なのか？」
「有名も何もトップランクの戦士だよ！」
「成る程ね」
「それに一般からの人気もある。助けてもらったって人も多いんだよ」
彼女の性質はきっと人に好かれるものである事は出会って短いが、何となく理解できる。
「あはは、ちょっと恥ずかしいね」

ポリポリと彼女は頬を掻く。
「ほ、ほら、そんなことよりも君たちの武器でしょ？」
パンパンと手を叩いて話を元に戻した。
「あ、お願いします！」
「お願いします」
光樹に続く形で小鳥遊は頭を下げる。彼女に武器の選び方を教わった方が生存確率を上げられると小鳥遊は考えたのだ。
「剣は頑丈なものの方がいいんだよ。レベルシステムで力は上がってるからそれに耐えられるようなものが必要なの」
そう言って、彼女は親身になって武器選びを手伝ってくれた。最終的に二人の装備は予想以上に安く購入することもできた。
「がんばってねー！」
そう言って黒羽は武器屋を出て行ってしまった。既に用事を終えた後だったのだろう。
「よかったな、いい武器が選べて」
「おう！」
三日後、彼らは初めて異種族と戦うことになる。

第6話

三日ぶりにシェルターの外に出る。
世界が変わった訳ではない。それでも戦う力を手に入れた。無力に奪われるなどという事はないはずだ。
相変わらずの小鳥遊のレベルエラーは続いていたが。
「響、一番最初はゴブリンかコボルトがいいらしいよ」
それはきっと本の情報からだろう。小鳥遊もこの二日の間に、本を何冊か購入し、情報を集めた。
それは様々な異種族の倒し方についてであったり、初心者が気をつけるべき事であったりとためになることも少なく無かった。
「ゴブリンはそこら辺に居るらしいから」
槍を持ちながら光樹が言う。
「ああ、そうだな。ゴブリンはそこら辺に居るな」
シェルターに向かう道中で加藤が車でゴブリンを轢き飛ばしたのを思い出した。
確かにその通りだ。ゴブリンはそこら辺に居る。車で轢き、弾くことの出来るその程度の異種族だ。
基本、異種族はそこらに生息しており、どのような区域で生活をしているかなどは特にないようであった。
「ゴブリン見つけるまで頑張るか」
小鳥遊も気合を入れ直す。
何も失わないために。
ーーザッ。
その瞬間、背後から音がして、斧を構えて振り返る。
それは光樹も同じであった。二人はすぐにでも攻撃できるように構える。
「ちょ、ちょっと待ってください！」
少し慌てたような声を上げた。
そこに立っていたのは緑がかった金髪、見目麗しい碧眼の少女。尖った耳。明らかに人間ではない雰囲気。

小鳥遊の中でのエルフの容貌のイメージに一致する。
ファンタジー小説で見る共通認識を抱くような見た目である。
「だ、大丈夫です！貴方達を襲うつもりはありません」
そう言って彼女は必死に説得をする。見た目はほぼ人間に近く、殺すのも躊躇われてしまう。
本に記されていたのはあくまでも異種族の殺し方であって、異種族との関わり方ではなかった。意思のある異種族、人間と何ら変わらない見た目。
どうするか迷ったが、自分一人では手に余ると思い、光樹の判断を待つ。
その光樹は槍を下ろして、エルフの少女の言葉を信じることにしたようだ。
「ほっ、実はゴブリンにはエルフも迷惑しておりまして、ゴブリンを探しているんですよね？」
安心したのか少し息を吐いてから、彼女は事情を話し始める。
「ああ、まあ」
小鳥遊がそう答えると、エルフの少女は少しばかりの笑みを浮かべる。
「私も手伝います。一緒にゴブリンを倒しましょう」
敵意を特に感じない。信じてもいいものか。しかし、即断するには恐ろしい。
「私はミラ、宜しくお願いします」
悩む時間は十分とは言えなかった。
流されるように二人はミラの協力を手に入れることになった。
手当たり次第、町を調べること三十分程。ゴブリンの声が聞こえた。
「見つけました」
「よし」
場所は住宅などから離れた木々の生茂る場所。緑も多い場所である。
目の前にはゴブリンが三匹。

小鳥遊と光樹はそれぞれ、斧と槍を構えて、ジリジリと距離を詰める。
そして、勢いよく駆け出して小鳥遊は斧を大きく横に振るう。光樹は槍でゴブリンの頭を一突き。頭蓋をも貫いて、槍は貫通、一方小鳥遊が振るった斧はゴブリンの頭をぐちゃぐちゃに破裂させ、折れて壊れてしまった。
何があったのか一瞬理解ができなかった。呆気にとられているうちに一匹のゴブリンが逃げ出そうとするが、光樹は見逃す事なくそのゴブリンに槍を投擲して、貫く。
「ありがとうございます！」
そう言ってミラが走り寄ってくる。
「初めてにしては上手くいったんじゃないか？」
光樹はそう言いながら、槍を肩にあてる。
彼の視線は壊れてしまった小鳥遊の斧に向けられているが。
「響の武器は壊れたけど」
「今度から値引きないんだったか……」
持ち手しか残っていないそれはヒノキの棒よりも頼りない。
「ミラ、これでいいの？」
光樹がそう尋ねれば、ミラもニッコリと笑顔を浮かべて、
「はい！」
と、答えた。
「んじゃ、俺たちも帰ろう」
そう言って、二人は背中を向けてそこから離れようとする。
ーーピシュッ。
そんな矢を発射するような音が聞こえた気がして、小鳥遊は光樹を突き飛ばす。
ーー始めから完全には信じていなかった！
疑っていたからこそできた判断と行動。
「いった！な、何だよ？」
突然のことでよくわからないと言った様子であったが、すぐに理解した。

「矢？」
　先ほどまで立っていた位置に確かに矢が突き立っている。
「ミラ……。あんた、どう言うつもりだ」
　その弓矢を放ったミラを小鳥遊は睨みつける。
「あれ、外れちゃいましたか。残念です。一撃であの世に送るつもりだったんですが」
「何のつもりで……」
「だって、おかしくありませんか？人間は私たちによって支配されているべき存在ですよ？それなのに力を持って……。全く、その途端に異種族を殺せだのと我がまま過ぎますよ……」
　その口から漏れるのは文句。憤りを孕んでいるその声に、殺気が混じり込んで緊張感を生む。
「とは言っても、流石に一人でやるのは面倒ですからね」
　その瞬間に、何者かが切りかかってきた。口元を隠しているが、尖った耳から同じくエルフだと推測できる。
「では、死んでください」
　エルフは人間と同じほどに、狡猾な異種族であった。

第7話

切りかかってきたエルフの女を小鳥遊は蹴り飛ばす。
木々の生茂る中、四人が対面する。
「お前らが人間を殺す理由は？」
意思疎通が取れるのなら、聞いておいて損はないだろう。
「さっきも言ったでしょう？人間のわがままにはウンザリなんですよ」
「……それは、元々、支配してたお前らがいたから人類の反乱が起きただけだ。なら、人間が力をつける前から人間を殺していたって考えられる」
先ほどの事から、彼女は支配していたような口ぶりであった。見下しているような考え方だった。
しかし、人間は、人類はそれを認められなかったのだ。
反乱が起きたのは支配に問題があった。彼らの支配は、法による支配ではなく、力による重圧的な支配であったから。つまり、異種族の存在は人間にとって極めて不都合な存在であったはずだ。
「ーーまあ、どうせ知ったところで無意味ですから、教えてあげますか」
「ミラ」
口元を薄い布で隠した、黄緑色のショートヘアーの少女が名前を呼んで確認をとる。
「大丈夫です、カミュ」
ミラは諭すように優しい口ぶりで彼女の名前を口にした。
「ーー私たちの体には、人間《下位種》の体には流れていない青血が流れています」
「青血……」
それはレベルアップシステムと経験値システムの恩恵を得るための鍵となるもの。
「これにより私たちは力を得ています。青血が濃ければ濃いほどに私たちは強くなる」

まさか。
そう思った。
何せ、そうであれば人間を殺す理由として合理的だから。
その青血の濃度を増すものは。
「ええ、貴方の想像通り」
その瞬間にカミュは光樹に迫る。
それを再び間に入って止める。はっきり言ってレベル一ではエルフは相手にならない。ゴブリン二体を倒したからと言ってレベルが上がる訳でもないのだ。
「青血の流れない生物を殺すことによって私たちは強くなるのです！」
そう叫び、彼女は三連続で矢を放つ。それは恐ろしいスピードでカミュの背中に迫る。
――仲間ごと……！
そう思ったが、身軽な動きでカミュは跳ね上がり、その矢を躱した。
「ぐっ」
矢が刺さると思い身構える。
三つの矢が盾にした腕に突き刺さった。
「そして、世界は弱肉強食で成り立ちます。ならば、人間が食われるのも支配されるのも仕方ありませんよねぇ？」
ミラは獰猛に笑う。
そこには先ほどまでのような愛らしさはなく、人間の中にある支配へ対する反逆心をくすぐる。
小鳥遊は刺さった矢を腕から引き抜く。
「さて、カミュ……」
「ミラ、これは一人で十分。帰ってもいい」
「……成る程、そうですか。では任せますね」
クスリとミラは笑ってその場を後にする。
「良いのかよ。二対一だぞ」
小鳥遊がそう言うと、先ほどまで座り込んだままであった光樹も槍を構えてゆっくりと立ち上がる。

「貴方達ではどうせ勝てない」
「……言ってろよ」
使い物にならない斧の持ち手を捨てて、適当に小鳥遊は構えた。腕は顔の前。ボクシングの構えだ。
「ずっと見ていた。たかだかレベル一の貴方は反応もできずに死ぬ」
静かにカミュは斬りかかる。
反応ができないと思っていた。しかし、それは違う。レベルエラーの特異性。それは戦いの中で花開いていく。
「何っ！」
信じられないことが起こる。
カミュの想像を超える能力で、迫りくる斬撃を尽く小鳥遊は避ける。
「すげぇ……」
その戦いに手を出すことができない。自分では足手纏いになる。そう理解する。
なら、武器を持っていても意味がない。
「ーー響、使え！」
そう言って槍を投げると、投げられた方向を見向きもせずにキャッチする。
光樹は無防備となるが、その分、小鳥遊が守るだけだ。
戦いの中の超集中。
迫る剣撃を全て弾き、最低限の動きで避け続ける。
「くそっ！人間程度が！」
本来、エルフと戦うのに求められるレベルは三十以上である。個体差により差があり、もしかすればレベル七十を超えても敵わない存在もいるかもしれない。
目の前にいるカミュは人間にしてレベル六十はある程の強さ。
洗練された剣技は様々に変化をつけ、フェイントを交えて小鳥遊の命を奪いにくる。
ただ、そのどれもが小鳥遊には通じない。技量は足りていないものの小鳥遊の体は最適解を反射的に導き出していく。

「ふっーーー!」
一瞬の隙を見つけて、小鳥遊は攻撃に転じる。槍は凄まじい速度で、剣を握るカミュの手に衝突。
その瞬間、ゴブリンの頭が弾けた時と同じようにカミュの腕が、弾けた。
「ぐあああああああっ!!!」
血と肉の花が咲いた。
カミュは目を見開き、痛みを訴えるために叫ぶ。その叫びは緑の覆う世界でこだまする。先の無くなった腕からはボトボトと血が滴る。
弾けた腕は、断面と言えないほどグロテスクに崩れている。そして、彼女の持っていた剣も、小鳥遊が渡された槍も壊れてしまっている。
「俺の槍があ……」
せっかく購入したと言うのに、貸すだけのつもりが壊されてしまった。
カミュに戦闘続行は不可能である。そして、武器のない小鳥遊もまた戦闘を続ける意味がない。
「くそっ、人間なんかに……。私が、私が負ける?」
信じられない。
信じたくない。
心ここにあらずと言った様子で、現実を必死に否定する。
「あり得ない!あり得ない!ありえ、な……」
ザクン。
叫ぶ彼女の胸を一つの剣が貫いた。
「ーー大丈夫?」
確かめる声がエルフの背後からした。
金色の剣が生えている。それはオリハルコン。血に染まった剣はそれでも美しい黄金だ。
その剣をカミュの胸に突き刺したのは武器屋で出会った黒羽ユカ

リという少女であった。
「黒羽さん……」
　見知った顔に手に握っていた今や先の折れたただの棒切れを地面に落とす。
「ん、ああ。小鳥遊くんと斎藤くん？」
「黒羽さん、何でこんなところに？」
　小鳥遊がそう尋ねる。
「うん？何処にいても自由でしょ？」
　そう言って彼女はエルフの背中から刺さったオリハルコンの金色の剣を引き抜いて、血を払ってからゆっくりと鞘に収める。
「それにしても、災難だったね。戦士になってすぐにエルフに会うなんて……」
「はあ」
　なかなか実感が湧かないが、戦士として実力者である彼女が言うのだから今回は本当に不幸なんだろう。
「だってエルフは中堅戦士でも苦戦するんだからね」
　その言葉を聞いて小鳥遊は光樹にアイコンタクトを取る。こちらでも長年の付き合いであったからか、言いたいことは伝わったようだ。
「それにしてもこのエルフ、随分弱ってたみたいだけど、どうして？」
「ーー高レベルの戦士が戦ってたんだと思います。腕もありませんし」
　光樹がそう答えると、
「成る程ね」
　黒羽も先のないカミュの腕を見て納得の表情を浮かべる。
「ところで君たち武器は？」
　光樹に渡された槍も今となってはただの棒切れ。見る影もない。
「ええと、壊れちゃいました」
　苦笑いを浮かべながら小鳥遊がそう答えると、黒羽はそっかと呟く。
「まあ、エルフだからね。腕がなくてもレベル一には負けないか……。

取り敢えず、本当に良かったよ。知り合いが死んでたら、私、引き摺るかもしれないから」
そうして再びニッコリと笑顔を浮かべる。
「じゃあ、私はもう少し異種族を倒しにいくけど、君たちはもう武器も壊れちゃったみたいだし帰った方が良いんじゃない？」
その言葉に二人は頷く。
一先ず、三人で林を出て、そこで彼らは別れることにした。
異種族はそこらを跋扈しているため、見つからないように慎重に移動している。
「ーーなあ、響」
黒羽と分かれてしばらく帰り道を歩いていると光樹が質問してくる。
「……」
それはわかり切っていたはずだ。気にならないわけがない。それに光樹なら信頼しても良いだろう。
「何で、お前はエルフと戦えてたんだ？」
光樹という小鳥遊が知っている、現状、誰よりも信頼できる人間には話しても大丈夫だろう。
「分からない」
「レベルは？」
「それも分からない」
「は？」
「光樹、レベルは？」
逆に小鳥遊が光樹に質問を返せば、少しだけ確認の時間をとってから彼は素直に答えた。
「まだ一だけど」
「……俺はレベルエラーなんだよ」
「うん？」
言葉の意味を理解できなかったのか、光樹は問い返す。無理もない。前例もないのだから。
「レベルが分からないんだ」

そういうとポカンとした顔をする。
「マジで？」
マジで。
小鳥遊が光樹の言葉を繰り返すように、そう返せば光樹は驚愕の表情を浮かべそうになるが、すぐにその顔を潜めた。
「……大丈夫なのか、それ？」
そして、心配そうな表情を浮かべる。
「分からない」
「バレたら、マズいかもな……」
「だから黙っててくれ」
「……分かったよ。でもレベルは報告の義務があるけどもそれはどうする？」
「お前と同じレベルで出しておくよ」
天星には誤魔化すなと言われたが、仕方がないだろう。レベルをエラーですと出すなんて、あまりにも馬鹿すぎる。
原因不明のレベルエラー。
今回のことによって光樹の協力を得ることができ、レベルを誤魔化す方法も手に入れた。
これで一先ずは小鳥遊の異常な強さに光樹は納得が言ったようだ。
「あのさ、俺、今回のことでよく分かったんだ」
話題が変わる。
「うん？」
「異種族は信頼しちゃいけないんだよな」
「みたいだな」
人間と友好的な異種族など居ないと考えた方がいい。知能ある異種族は狡猾に人を殺し、知能がなければ力で制圧する。
結局のところ人間にとって異種族は害悪でしかない。
「ーー俺、もっと強くなりたいよ。響に守られなくても良いくらいにさ」
光樹が小さな声で言った。
「……無理しないでくれよ」

もう二度と、あんな事を繰り返したくない。小夜の時のように失うのは嫌なのだ。

「心配はさせたくないからな……。お互いの為にも」

互いが互いに生きていることが、心の安全を保っている。頼ることができる人間、頼ってくれる人間、そんな持ちつ持たれつの友人関係が家族のいない今は何よりもの精神安定剤なのだ。

太陽が少しだけ西の方角に沈み始めていた。二人はゆっくりとアスファルトの地面を歩いて行く。

第８話

「お疲れ様です、小鳥遊くん」
「響、この人知り合い？」
　ギルドに無事にたどり着くと加藤が出迎えてくれる。光樹は加藤のことを知らない。
「あー、加藤さん」
「どうも加藤泰治です。そこの貴方も野菜ジュース要りませんか？」
　そう言って彼はカバンから紙パックの野菜ジュースを二本取り出した。
「え、えと、どうも？」
　光樹の頭の上にクエスチョンマークが浮かんでいるような気がする。
　ただ、これに関しては気にするだけ無駄だ。
「ありがとうございます」
「いえいえ、ビタミンは大事ですからね。ビタミンは健康への一歩です」
「響、何この人？」
　小声で小鳥遊に質問を投げかける。
「ビタミンの使者だよ」
「何ですかその雑な紹介は……。しかし、ビタミンではなく野菜ジュースの使者と言ってもらいたいところですね」
　彼自体、野菜をそこまで摂取できていないから野菜ジュースに頼っている。
　だから、加藤は野菜ジュースは栄養バランス的にとても重宝しているのだ。そんな彼は野菜ジュースの素晴らしさを布教しようと常備している。
「今日はパンはないんですか？」
「残念ですがね。もうすぐ買いに行きますよ」
「あ、はい。さようなら」
　そう言って加藤との話を打ち切って、二人は帰ろうとするが、加藤

が止める。
「いや、少し待ってください。やはりパンも渡さなければ私では無いといいますか……」
「いや、大丈夫ですよ」
別にパンを求めてはいないから。
断って自室に戻ろうとする。
「あ、そうではなくてですね。ーー大丈夫でしたか、小鳥遊くん」
「見ての通りです」
「武器が無いようですが……」
「破損しました」
小鳥遊は事実を伝える。
「えと、そちらの彼のも？」
光樹はその質問に頷きで返す。
「何があったんですか？」
「手負いのエルフと遭遇したんですよ。黒羽さんに助けてもらいました」
光樹が答えると、
「ああ、そういう事ですね」
加藤は顎に手を当てて呟く。彼も納得したようだ。
「いえ、武器は壊れてしまったようですが無事で何よりです。今日一日お疲れ様でした」
加藤は背中を向けて歩いて行ってしまった。心配してくれていたのだろう。
「あの人がパン買ってくるの待ってる？」
そんな背中を見て、光樹は冗談半分で提案してみる。
「いや、来るのか？」
そう言いつつも、加藤はしばらく待ってみることにした。
そんなこんなで十分ほど待つと、パンを購入した加藤がやってきて、二人にパンを渡して行ってしまった。
「何だ、あの人の執念……」
パンを渡してまた去って行った加藤の背中を眺めながら、光樹がそ

う呟いた。
パンと野菜ジュースを持って、彼らは自分たちの部屋に向かって歩き始めた。

翌日、光樹と小鳥遊は再びシェルターの外に出る。その手には新調した武器が握られている。
光樹は相変わらずの槍。小鳥遊はその力のせいでほぼ全ての武器は壊れることが前提になるため、最低限のものを複数だ。
「響、レベルが上がれば給料も増えるんだ」
「嘘の報告したら得じゃないか、それ？」
システムとして大丈夫なのだろうか。
「時々、ギルドから依頼されることがあるから、その時に死ぬだけだよ、そういう奴らは」
だから、戦士は増えて減ってを繰り返している。それ故にレベルが高い人間がいい装備を持つのも当然と言える。
「だから、今日もゴブリンとかを狩っていればいいんだ」
それもそうだ。
「多分、響はもうとっくに強いからレベル上げは必要ないだろ？」
「どうなんだろう……」
レベルがわからない。強さの指標がわからない。どの程度の相手に通用するかも。
「大丈夫。響はそこらの戦士には負けないくらい強いから」
そう言って光樹が笑う。
その言葉を信じていいのか。
「流石に黒羽さんには勝てるかわからないけどさ。あのエルフと戦える、寧ろ圧倒してたくらいだし」
カミュの強さは中級戦士以上。ならばそれを凌駕する小鳥遊の力はどれほど低く見積もっても、トップレベルと言える。
それでも、レベルエラーを隠さなければならないのは、小鳥遊の身を守るためであった。

「俺が強くなるまで待っててくれよ」
「危なくなったら俺も戦うからな」
どれだけ力がなくても、きっと小鳥遊は、たった一人残された友達の光樹を守るためであればその体を盾にする。
「うん、ありがとな」
それから、彼らは歩き始めて、今日の敵を探す。失いたくない、守りたい、生きたい、そう願うから、強くならなければならない。
目の前で、知らない場所で、大切なものを失いたくないから。
「ーー見つけた」
目に飛び込んできたのは人間よりも背丈の低いドワーフ。着ているのは布切れである。
「どうするんだ？」
人型に近く、ドワーフなのだからきっとゴブリンやオークなどよりも理性的で厄介なはずだ。それにゴブリンやオークよりもレベルが求められる。
それでも、基本的にどんな生物も不意を突けば殺せるのだ。
だから、これはチャンスだった。
「あんまりさ、こう言うのって良くないかもだけど。殺すよ」
良くないというのはレベルに見合っていないから、と言うことだろう。それでも、光樹は強くなりたい。それに強い仲間がいる多少の無茶は大丈夫だろう。
真剣な表情で光樹が告げる。
「本当に危なくなったら助けるから」
その言葉を小鳥遊は否定するつもりはない。異種族は何であれ、人間にとって害悪な存在だ。
それはエルフのことで分かった。
「うん、頼むよ」
強さを知っているから、一言そう言って光樹はグレーのパーカーのフードを揺らしながら、飛び出していき、ドワーフの心臓を背後から手に持つ槍で突き刺して殺そうとした。
その瞬間に溢れ出るのは赤い液体のはずだった。

ーーガキン！
そんな金属がぶつかり合うような音が響いて、ドワーフはゆっくりと振り返る。
小鳥遊はその光景を見て、すぐに陰から飛び出した。
ドワーフの腕から光樹の命を奪い取らんと振るわれた棍棒を弾く。
目の前で起こるそれを光樹は黙って見ていることしかできなかった。
「響……！」
バクンバクンと光樹の心臓がうるさいほどに鼓動する。それは小鳥遊も同じだ。
今、目の前には、二体のドワーフが立っている。片方は先ほどまでいたドワーフ。
もう一体のドワーフは、最初からいたドワーフとは違い鎧を身に纏い、立派な顎髭を蓄えている。
「人間風情が、オレの息子に手を出そうとするなんてなァ……」
渋い声、鋭い目つき。恐ろしいほどの殺意が空間に漂う。空は曇り模様。体が普段より重たく感じる。
彼ら以外は誰もいない住宅街、異種族と人間の争いが一つ。起きようとしていた。
「ガドル、準備は良いか？」
「おう、親父……」
親の言葉に頷き、ガドルと呼ばれた息子ドワーフも棍棒を構える。

第9話

初めに動いたのは親のドワーフだった。棍棒を振りかぶって小鳥遊ではなく光樹に襲いかかる。
しかし、小鳥遊はその間に入って粗悪な剣でドワーフの一撃を受け止める。
「チッ。ガドル!そっちは任せた」
親ドワーフが背後にいるガドルに叫べば、ガドルは棍棒を構えて、
「おうよ!」
と、返答し光樹を殺そうと襲い掛かる。
光樹は槍を構えて、迎え撃とうとするが、明らかにドワーフを倒すほどの実力は足りていない。
シェルター外に出る前に購入した短剣をガドルに向かって小鳥遊は勢いよく投げた。
「チッ!」
そのせいでガドルは攻撃ができずに後ろに退く。
「ーー余所見してていいのか、よっ!」
親ドワーフが、大きく振り上げていた棍棒を、小鳥遊を叩き潰すために勢いよく振り下げた。
それをガドル同様に後ろに飛ぶことで回避する。
先ほどまで小鳥遊が立っていたアスファルトの地面はパラパラと砕ける。
レベル一ではまず、勝つことのできない実力だ。
「すまねぇ、親父……」
「気にすんな。どうせ雑魚だ」
それで親子の会話は終わったのか、二人を睨みつけてくる。
「小鳥遊、悪い。俺のせいで」
「いや、大丈夫だ」
「どうする、逃げる?」
光樹がいる今、彼は自分が足手纏いになると言うことを自覚していた。ならば、逃げてしまった方がいい。

「ーーいや、逃げる必要はねぇ」
光樹の質問にカミュと戦った時のような真剣で鋭利な気配を立てて答える。
「ここで殺す」
満ち溢れる殺意と決意。
小鳥遊は再び、戦闘態勢を取る。
「光樹」
「うん？」
「槍構えとけ」
正面を向きながら、小鳥遊がそう言う。光樹はその背中を見て、尋ねる。
「でも、俺は足手纏いだろ……」
「良いから。レベル、上げたいだろ？」
その言葉に光樹が答えを返す間もなく、戦闘は始まった。
カミュとの戦いと同じだ。高レベルの戦闘が行われる。ただ、今回は二対一の形になる。
ガドルは親ドワーフと小鳥遊の戦闘に関わる気もなく、最初に光樹を殺し、そのあとで助太刀に入ろうとしていた。
「ぐっ！」
しかし、その度に邪魔をするように入ってくる短剣の投擲により、光樹に近づけない。
ならば、先に小鳥遊を協力して殺してしまおう。そう思って、親ドワーフが相手をしていた小鳥遊に標的を定め棍棒で殴りつけようとする。
小鳥遊は親ドワーフとの戦いに集中している。なら、背中は隙だらけだ。
「ガドルッ！止めろ！」
それに気がついた親ドワーフは叫ぶ。
ガドルでは勝てない。
しかし、その叫びも、背後に迫るガドルにも気がついていた小鳥遊はその瞬間の全てを見逃さない。

凄まじい膂力で親ドワーフを棍棒ごと蹴り飛ばし、背後に迫るガドルの棍棒を持つ手と、両足を切りつける。
振るわれた剣はガドルの手と足を切ると共に持ち手だけになってしまう。そうなることはわかっていた。
そうして、また粗悪な剣を取り出す。
「光樹。その若いドワーフに止めをさせ」
そう言われて、光樹は槍を持ってガドルの近くに駆け寄った。
苦痛に喘ぐ顔を浮かべるガドルの姿。
それを見て、動き出したものが一人。
「ガドルゥウウウ!!」
憤怒の形相を浮かべ、我を失い彼は棍棒を振りかざしてガドルの目の前に立つ光樹を叩き潰そうとする。
しかし、彼は忘れていた。自身の目の前には小鳥遊という脅威がいることを。
小鳥遊は勢いよく、粗悪な剣を怒り狂うドワーフの腕にぶつける。
その瞬間、ドワーフの腕が爆ぜた。
「ぐぬぅぅぅぅーーっ!」
痛みに叫ぶドワーフの足に、小鳥遊は短剣を二本突き刺して、アスファルトの地面に縫い付ける。
「親父!」
涙を流しながらガドルが叫ぶ。
ただ、小鳥遊が、光樹が、異種族に与える慈悲など一つもない。
自らの親を守ろうと必死に残った左手を使って、アスファルトに血をべったりと塗りたくりながら匍匐する。
そんなガドルの背中を一本の槍が貫いた。
「あ、が……」
そして槍は一度引き抜かれ、最後に後頭部を刺し貫く。頭からは赤い血が溢れる。
それを見て男が叫んだ。
「あ、ああ……、貴様らあああああ!!」
怒りが、憎しみが、恨みが。様々なマイナスな感情が湧き上がる。

子を殺された。目の前で我が子を殺された。
脳内は殺意一色に塗りつぶされる。
「俺の子を、よくも、よくも！」
家族のために彼らが怒るならーー。
「随分、都合のいい考え方だな」
奪われ続けてきた人間の家族のことを、彼らは少しでも考えたのだろうか。
縫い止められた足では動くこともできない。だから、死は避けられない。目の前に迫った光樹の槍がゆっくりとドワーフの目には見えてしまう。
ドプリと沈み込むように槍の穂先が、ドワーフの脳天に吸い込まれた。
「レベル、アップ」
光樹は自らのレベルを確かめて、小さくそう呟いた。
レベルアップという言葉を聞いたが、小鳥遊が光樹の方へと視線を向けることはない。
「レベル何になった？」
倒れたドワーフの死体を見ながらそう尋ねる。
それに、
「八レベ。一気に上がったよ」
突き刺さった槍を引き抜きながら、光樹はすぐに答えた。
「そっか」
小鳥遊は蹲み込んで、ドワーフの体から流れ出ている血に目を凝らす。
「ーーなあ、青血ってさ」
地べたに塗りたくられた赤色。
「青くないんだな」
どこにも青色など見当たらない。青血とは言われているが、それに大した意味はないのかもしれない。赤よりも青の方が異物のような気がするとか、そんなものなのかもしれない。
「まあ、青血は目に見えないからね」

「……こいつらも赤い血が流れてんだよな」
人間とは違う生き物。
見た目が人間と大差がないから、どこか油断してしまうのかもしれない。信じてもいいかもしれないと。流れる血だって赤色と変わりない。
ただ、目に見えない青血と呼ばれるものが流れているかどうかの違いだ。
「お前はさ、何か感じることはないのか？」
蹲み込んだまま小鳥遊が尋ねれば、頭上から声が聞こえてくる。
「奪われたくないから」
彼らを放置していれば、誰かが奪われるかもしれない。それが怖い。
家族を奪われて異種族は憤りを見せる。
それは人間も同じだ。
「そうだな」
それだけで戦う理由としては十分だ。
納得に、理解。その質問をする必要はなかったのかもしれない。小鳥遊も光樹もお互いに奪われてきたのだから。特に光樹はきっと、小鳥遊以上にそれを実感している。
強くなって、守りたい。迷う必要などない。異種族は人にとって害悪種でしかないのだから。
「よし、次に行くか」
小鳥遊はドワーフの死体から目を離し、立ち上がった。
幸い、買いたての粗悪品はまだまだある。短剣と、鉄の直剣。
「流石にドワーフレベルは俺、無理だよ、もう」
ガッチガチに緊張してしまい、結局のところ止めを差すことしかできなかったのだから、それは仕方ないのかもしれない。
それも無理はないだろう。
「仕方ないか、んじゃゴブリンにするか？」
小鳥遊が顔を上げてそう提案するが、光樹は悩ましげな表情を浮かべる。

「どうした？」
何か問題でもあっただろうか。
「いや、ゴブリンはレベル五までは上がるけどさ、八レベなったし効率悪いかな」
青血が薄いゴブリンではレベリングにははっきり言って向かない。
ならどうするんだ。
そう思って小鳥遊が光樹に視線を向けた。
「オークとか、どうかな？」

第１０話

思いの外、すぐにオークは見つかった。住宅街を出てすぐの場所だった。少し広い道路の真ん中にそれはいた。
距離は目測で四十メートル。数は五匹。
駆け出したのは二人同時。
速いのは、小鳥遊。
グシャリとひしゃげるような音が響いて、オーク二匹の頭が木っ端微塵に弾けた。
恐れをなしたオークが逃げようとするが、そこに槍が飛来し、心臓が貫かれる。
「ちょ、響！俺のレベル上げだからな！」
突き刺した槍を抜くために、今し方倒れたオークに近づく。
そして、槍を引き抜くと、オークの体からは血が溢れる。
恐怖を掻き立てられたのか、生き残ったオークは逃げるかのように走りだした。
「……悪い」
オークを見て湧き上がる殺意を抑えることができずに殺してしまった。
「あ、いや、仕方ない、よな……」
光樹も小夜の死んだ理由を思い出す。小鳥遊の気持ちは理解できる。それを否定するつもりもない。
「……いや。俺のせいでお前がレベル上げれないで死んだら嫌だから。我慢するよ」
オークという相手に執着するのは良しとしても、それで光樹のレベルが満足に上がらず、死なせるようなことになってしまっては元も子もない。
折れた剣をしまって、新しく別の武器を手に取った。新しく取り出されたのは斧。右手に一つ、左手に一つ、斧が握られる。
「悪かったな……」
「あ、いや、お前が良いなら良いけど」

何となく。そう、何となくだ。
この話題に触れるのは気が引ける。それでも、気遣うのは当然だ。壊れて欲しくはないから。
「けど、オーク逃げちまったな」
逃げ出したオークの背中は見えなくなってしまった。
新しい異種族を探すかと構えを解こうとしたとき、前方から何かの集団がこちらに近づいてくるのを見た。
その数、おおよそ十。
先ほどのオークよりも多い。
「アイツらダ！アイツらガ、メグ達を殺した！」
その中心にはオークの中でもきっと強力であろう、巨大な身体の持ち主がいた。
「ーーお前が、メグ達を殺しタのカ？」
メグが誰かは分からないが、きっと先ほどの三体のオークのうちの一匹だ。
「光樹」
小鳥遊は笑顔を浮かべ、斧を構えた。
「オークが来たぞ。来たぞ、経験値が」
武器を入れていた大きなリュックはもう殆ど何も入っていない。今日はこれまで。
このオークを狩り尽くして終わり。
「でっかいのは俺がやるから」
「んま、そうだよな」
強さを考えてもオークのリーダーであろう巨体の持ち主を相手取るにはまだ光樹では足りない。
ーー殺してやる。
二人は目の前のオークを見て笑う。様々な感情が混ざった、混沌とした笑みにリーダー以外のオークは身体を震わせた。
小鳥遊達の目の前にいるのは豚鼻の巨体。
オークはその手に剣であったり、槍であったり、棍棒であったりとそれぞれの武器を持っている。

最も巨大な四メートルは有りそうな大きさのオークのリーダーは、大きさ二メートルもあろうメイスを片手で軽々と持っている。
「貴様ラは我が同胞ヲ殺しタ。覚悟は良いカ……」
ひょうと空気が変わる。
乾いた風が頬を撫でる。この場にいる全員が共通の感情を持った。
それは殺意である。
黒く、暗い感情。塗り潰されていくような、埋め尽くされていくような感覚。しかし、研ぎ澄まされていく五感。
それは戦場の超集中。
空間は殺意によって満たされていき、突如として生存競争が始まった。
狩る者、狩られる者。
どちらがどちらか。
人がオークを狩るのか、オークが人を狩るのか。
本来であれば人は狩られる存在でしかないはずだった。
しかし、この戦いではどうだろうか。
「死ネ!」
そう言って一匹のオークが先頭を走り、その後に続く形で三匹のオークが光樹に向かって駆け出す。
それを冷静に冷めた表情で光樹は見ている。
「……こいよ、お前がリーダーだろ?」
小鳥遊は二つの斧を構えて、目の前に立つボスオークを睨みつける。
「調子に乗ルなヨ、人間風情ガ」
ボスオークはズシリとその大きな体を揺らしながら、小鳥遊に近づきメイスを振り下ろした。
オークの視界の横で飛んでいく腕が見えた。
もう、終わったのだと思った。
人間に手こずるわけが無いのだと考えた。
下らないと溜息を吐きそうになった。
しかし、飛んでいくその腕を見て目を見開く。

「ーーあっ？」
切り飛んでいくのは仲間の腕。
小鳥遊との戦いがまだ終わっていないと言うのに、その視線は自らの部下に向けられる。
それが隙に見えるのは当然。
「余所見してんなよ」
その言葉が聞こえた瞬間に、オークは自らの命の危機を本能的に感じ取り、顔を後ろに引いた。
ブゥン、と斧が顎先すれすれを通り過ぎていき、風が撫でる。
「な、何故、生きてイル！」
先ほどの一撃で終わったのでは無いか。メイスの一撃の前で木っ端微塵の肉片へとなった筈だ。そんな思い込みがオークの脳内を支配する。
「よく躱せたな……」
オークの質問に答える事はない。
そして、光樹の槍に撥ねられてオークの頭が飛ぶ。転がり落ちていく。
「ーーよ、よくもォオオ！」
一匹のオークが死んだのを見ていた別のオークは激昂したのか、攻撃が激しくなる。
そして光樹の元に全てのオークが向かう。仲間の仇を取らねばならない。この男を許すことができない。
そして、それは小鳥遊の目の前にいるボスオークも同じであった。
「グオオオオオオォオオオオオ!!!!!」
咆哮。
獣のような雄叫びが響く。
「殺セぇ！その男を、人間を殺せエ！」
それに答えるようにオークは雄叫びを上げる。もはやその目には、小鳥遊など微塵も興味がないようだ。
単純でわかりやすい。
「俺を忘れてんじゃねぇぞ、と！」

勢いよく小鳥遊が斧を振るうが、その一撃はオークに避けられてしまう。
何故。怒りに呑まれているのに。
どうにもそれは人間にはないであろう獣の直感、本能であるのだと理解する。
「ウォオオオ！」
理性を失ったような充血した白い目。
メイスは力強く振り下ろされて、アスファルトの地面を砕く。その威力はまるでドワーフの一撃。
ただ、それだけだ。
斬り込んで、切り裂いて腕が飛び、突き殺して血飛沫が舞う。
鉄の匂いが充満する。
悲しくも切り飛ばされる腕は全てオークの腕であった。レベル八はレベル一とは比べ物にならない程の強さだった。そこらのオークでは幾ら集まろうと相手にならない程に。
そのオークの青血はそこまで濃くなかったのかもしれない。
「どうしたどうした！もっと青血を流せよ！」
まるで狂った戦士。
それは人間もオークも変わりなく。理性の壁はなく、ただ目の前の敵を殺すことに全てが洗練されていく。
「ガアァァアアアッ！」
臆することなく、傷を気にすることなく血だらけで腕がなくとも暴れ回る。
「ハハハッ！オラオラァッ！」
槍は心臓をブチ抜いていく。
そして屍は積み重なる、一つ、二つと。赤い液を垂れ流しながら。
「残りはボス含めて六匹か……」
そう呟いている間にも、順調にオークの数は光樹によって削られていく。
小鳥遊の目の前にはメイスが迫る。
それを迎撃するように左腕で斧を振るうと、小鳥遊の武器である斧

もオークの持つメイスも同様に砕け散る。
オークにはもう武器がない。
もう片方の腕に握っていた斧を超高速でオークの顔面に叩きつける。
そうすれば、いつも通り
オークの顔が赤い花を咲かせるように弾け飛ぶ。
「ギャペッーー」
そんなふざけたような声を出して一際巨大であったオークはゆっくりと後ろ向きに倒れていく。
「終わりっと」
そう呟いて小鳥遊が光樹の方へ振り向けば、返り血をビッチョリと浴びた光樹と、理性を取り戻し、目の前の惨状を見て固まってしまった一匹のオークが立っていた。
直ぐに行動に移ろうとするが遅い。
首元に槍が突き刺さった。
「カフュッ……」
そして、その突き刺さった槍を引き抜き、脳天に再度突き刺す。
「こっちも終わりー」
オークに刺さった槍を引きぬけば血が吹き出る。
「今日はここまでだな」
小鳥遊がそう言うと、どうしてと言いたげな顔をして光樹が小鳥遊の顔を見る。
トントンとリュックを叩いて示す。
「もう、殆ど武器がないんだよ」
それで光樹も納得したようだ。
「あー、なるほどね。よし、じゃあ帰ろ」
特に文句はない。
一人で無理をして死ぬのなんてバカバカしすぎる。
何より、早く体に付着した血を洗い流したいから。